# 通時コーパスを用いた強意副詞 *VERY* 多様化の社会言語学的再考

## ―M4期から E1期を中心に―

# A Sociolinguistic Reinvestigation into the Development of *VERY* as an Intensifier: Based on the Diachronic Corpus during the Period Between M4 to E1

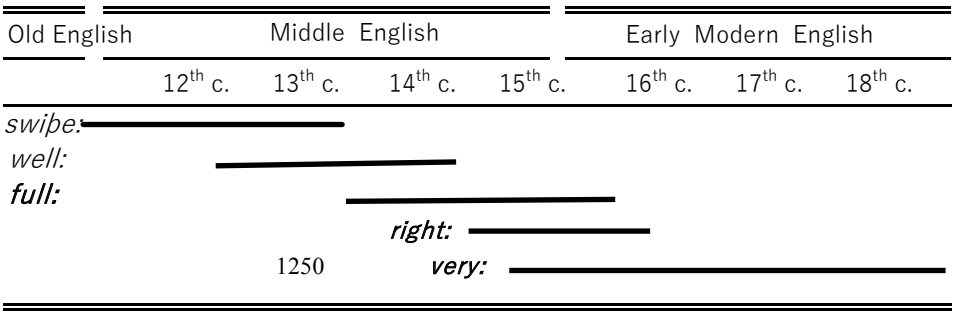
森　山　千　鶴

Chizuru MORIYAMA

## 0．はじめに

*VERY*（強意副詞は以下イタリック体）のように、強意語になる語彙は文法化[1]の過程を辿り、次第に本来の語彙的意味を失い、脱語彙化（delexicalization）[2]していくと言われている（Sinclair 1992, Partington 1993, Peters 1994, Lorenz 2002）。Partington（1993）は「脱語彙化」について、「本来自立した内容を持つ語句の意味が次第に薄れ、強意としての機能を持つ以外は特定の意味を持たないようになってくる」ことであると述べている。古英語（Old English: OE）[3]の時代から以下のようなさまざまな強意語が使用されていた。

表１　古英語から初期近代英語における強意副詞の概観




― Mustanoja（1960）に基づき作成 ―

中英語期（Middle Engish: 以下 ME）、特に後期中英語期（Late Middle Engish: 以下 LME）から初期近代英語（Early Modern English: 以下 EModE）にかけて *FULL*, *RIGHT*, *VERY* は代表的な強意副詞[4]として挙げられている。その中でも例えば very dangerous の *VERY* は、現代英語において、未だに強意語の一つであり、以下の引用のように典型的な文法化の例として論じられることが多い（Partington 1993; Peters 1994; Lorenz 2002; Hopper and Traugott 2003）。

In fact, the more delexicalized an intensifier, the more widely it collocates: the greater

> the range and number of modifiers it combines with. *Very* is a central example here: it combines very widely indeed and is also the intensifier with the least independent lexical content.
>
> （Partington 1993: 183）

しかしこの時期においての *VERY* の実態はどのようであったのだろうか。これまで多くの研究者によって論じられてきたところによると、強意副詞 *very* は M4期から E1期にかけて修飾する共起語（以下コロケーション）[5] 多様化したとされている。本稿の目的は、LME から EModE までの *VERY* の発達過程と *FULL, RIGHT* の関係に着目し、*VERY* がどのような過程を経て多様化したのか、ジャンル別のテクストファイルに焦点を当て具体的に明らかにすることである。

## １．調査対象と方法

ME から EModE にかけ代表的な強意副詞は、OE 以来の *FULL, RIGHT* であった。しかしながら1250年（M2期）にラテン語 *verus* 由来の古フランス語 *verai* 経由で借入された形容詞 *VERY*（*verray*）が、M4期頃に強意副詞化し用いられるようになると、M4期から E1期にかけて共起するコロケーションが多様化した。過去の研究によると、E1期には *FULL* が激減し、E2期には *RIGHT* も激減した。この時代の間に *VERY* の強意副詞化が急速に進んで行ったとされる。さらには *VERY* に取って代わり、引き継がれたと言われることもある。しかし森山（2016）の観察では、実際にはそれらは少し異なる。

本稿では、まず現代英語における強意語の定義および分類に関する先行研究を概観し整理した上で、ME における強意語の定義を検討する。その後、非強意的原義を有する語彙が強意語に変化するメカニズムとそのプロセスに関する先行研究を見ていく。これまでのコーパス研究においては、数値が注目され、ジャンル別のテクストタイプには格別焦点が当てられてこなかった。そのため *FULL, RIGHT, VERY* が出現するジャンル別のテクストと用例に注目し、社会言語学的分析を取り入れて比較検証することで、強意副詞 *VERY* の多様化の過程と *FULL* および *RIGHT* のふるまいの相関関係の有無が、より明確化することができるだろう。

その調査に当たっては、*FULL, RIGHT, VERY* が修飾する共起語を形容詞に限定する。データの分析として、*Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic Part*: Rissanen *et al*. 1991）[6] を用いて検証する。この通時コーパスは、通称 *Helsinki Corpus* と呼ばれ、c730-1710年までの約1000年間の総計約160万語の言語資料を収集した最初の英語史コーパスである。本調査では、LME（M3期 : 1350-1420, M4期 :1420-1500）から EModE 期（E1期 : 1500-1570, E2期 : 1570-1640, E3期 : 1640-1710）までをケースとする。しかし特に M4期から E1期に焦点を当て、強意副詞 *VERY* および *FULL, RIGHT* のテクストタイプ別の形容詞の共起語生起数と頻度および用例を調査する。

検索にあたっては、分析ツール *KWIC Concordance for Windows* を利用し、<Q ='Text Identifier' を用いる。調査を行う際に、一般にコーパスにおいて付与される言語情報コード、すなわち品詞標識付け（part-of speech（POS）tag; 文法標識（grammatical tag）とも呼ばれる）が *Helsinki Corpus* には付与されていないため、コロケーションの品詞を決定する際に綿密に精査する必要がある。

以上の手順により、これまでの先行研究の結果と異なる考察を加え、*VERY* の多様化の過程と *FULL* 並びに *RIGHT* との関係について考えていきたい。

## 2．強意語とは

### 2.1 現代英語における強意語の定義と分類

これまで数多くの研究者（Stoffel 1901; Bolinger 1972; Quirk *et al*. 1985; Partington 1993; Traugott 1993; Peters 1994; Lorenz 2002; Méndez Naya 2003; Ito and Tagliamonte 2003; Tagliamonte 2005, 2008など）が強意語について研究している。その中でも、今なお多くの研究者に言及・引用されている Stoffel（1901）は、「形容詞や副詞を修飾する強意語の大部分は、*pure, full, very* などの様に性質の変化を許さない形容詞由来の副詞である」と定義している。また現代英語における最近の強意語研究においても、Lorenz（2002）をはじめ、強意語の機能は厳密に言うと形容詞修飾にあると断言している。しかしながら、強意語の統語範疇については、用語の名称や解釈の視点からさまざまに論じられてきた。そこで Méndez-Naya（2003）は先行研究における強意語の定義の統語的な相違点を検証し、強意語として下記のように位置付けることが出来ると述べている。

（1）I *greatly* admire his paintings.（verb modifier）
（2）The play was a *terrible* success.（noun modifier）
（3）The article was *extremely* interesting.（adjective modifier）
（4）He was driving *very* quickly.（adverb modifier）
（5）He is *much* in favour of the US attack on Afghanistan.（PP modifier）
（Méndez-Naya 2003:373）

このように程度を表す副詞に対しては、統語的な特徴に関する議論を含め、意味特性に関しても研究者によって立場が異なる。[7] 用語に関して、強意語は一般に副詞と考えられることもあり、degree adverb, degree modifier, degree words, intensifying adverbs, intensifier, intensive などと呼ばれている。Quirk *et al*.（1985）によると、段階的形容詞および副詞を修飾する副詞は、程度を示す ‘intensifiers’ であり、intensifiers を amplifiers（増幅詞）と downtoners（緩和詞）に分類される。本論で扱う「強意語」とは、Quirk *et al*.（1985: 567）に従い、尺度上に想定される基準より高い程度（scale upwards from an assumed norm）を示す amplifiers に相当する副詞とし、以下「強意副詞」とする。したがって、形容詞や副詞を修飾する（3）や（4）を強意副詞として扱う。[8]

### 2.2　ＭＥにおける強意副詞

#### 2.2.1 ＭＥにおける強意副詞

前節では、現代英語における強意語の定義をみてきた。本節では、Mustanoja（1960: 319-327）を取り上げ、ME において強意副詞がどのように叙述されているのかを確認する。Mustanoja（1960）は、‘adverbs of degree’ を intensifying adverbs と weakening adverbs の2つのカテゴリーに分類している。intensifying adverbs の項目では、38種類の強意副詞が列挙されているが、Quirk *et al*.（1985: 445）のように、機能や意味範疇による下位分類がなされていない。intensifying adverbs は、Quirk *et al*.（1985: 445）の amplifiers、weakening adverbs は downtoners にあたるものと考えられる。Mustanoja（1960: 316-328）が記述した38種類の intensifying adverbs の中から、本稿で検証する強意副詞の変遷を概観する。

OE 以来さまざまな強意語が使用されていた。13世紀半ば以降 *SWIÞE* の人気が下火になると、*well* が最も頻出する強意語になるも、14世紀の半ばまでには *WELL* は *FULL* や *RIGHT* に取って代わられた。しかし16世紀には *FULL* も *RIGHT* に、また16世紀後半まで用いられた *RIGHT* も *VERY* に置換されることになった。*OED* によると、*FULL* の原義は、‘having within its limits all it will hold, complete, often with *of* or

*with* followed by the thing or things contained'、*RIGHT* の原義は 'straight, immediately, thoroughly' である。*FULL* は OE 以来、*RIGHT* は初期中英語期（Early Middle English: 以下 EME）には強意語としての機能も獲得していた[9]。*FULL*, *RIGHT* は強意副詞（intensifiers）ととして用いられ、*VERY* と同義で使用されていたこともMustanoja（1960）に記述されている。

### 2.2.2 強意副詞 *VERY* の発達過程

Mustanoja（1960）は、*VERY* の文法化の軌跡については、表2のようにⅠ - Ⅳに分けそれぞれの段階について用例を挙げて説明をしている。*VERY* の初出例は *Old Kentish Sermons* に見られ、神や人名あるいは称号などの名詞に前置され『正真正銘の、本物の（really, or truly)、真実の』（*OED very* a., adv. n[1]A. Ⅰ .1. a)）という語義であった。

表２　強意副詞 *very* の文法化

| Stage | Type | | Example | Date |
|---|---|---|---|---|
| 0 | Original sense :true, real (OF:verrai) | *very (Adj)* | *Be þet hi offrede gold..seawede þet he was sothfast kink, and be þet hi offrede Stor..seawede þet he was verray prest.* (Kent. Serm. in Old Eng. Misc. 27 c1250 ) | ME 2 (1250) |
| Ⅰ | Premodifying Noun. | *very (Adj)* +N | (1a) *This is a verray sooth with outen glose.* (Chaucer Squire's Tale 158 c1386 ) | ME3 |
| | Emphasis to the noun | | (1b)*...for verray feere so wolde hir herte quake* (Chaucer Franklin's Tale 860 c1405) | |
| Ⅱ | Premodifying Attributive Adj. | *very(Adj)*+ Adj + N | (2a) *he was a verray parfit gentil knight* (Chaucer CT A Prol.72) | ME3 |
| | (starting point for an adverb) | | (2b) *this benigne verray faithful mayde* (Chaucer CT. Cl E343 1395) | |
| Ⅲ | Premodifying Predicative Adj. (substantival colouring) | *very (Adj)* + N | (3a) *he shal be verray penitent.* (Chaucer Ⅰ Parson's Tale 87 c1390) | ME3 |
| | | / *very (Adj)* + Adj | (3b) *a man shal be verray repentent.* (Chaucer Ⅰ Parson's Tale 292) | |
| Ⅳ | Adverb | *very (Adv)* + Adj | (4) *he was sike ....and was verry contrite and sorwful in his herte* (Trev. Higd.Ⅵ 93 1405) | ME3 |
| Ⅴ | Adverb of Degree | *Very (Adv)* | (5) *Vere hartely your, Molyns.* Paston 2.520: Wrytyn wyth my nounce Chaunsery hond yn hast.... (1448) | ME4 |

―Mustanoja（1960: 326-327）より引用―

*VERY* の文法化について概観すると、Stage 0から Stage Ⅱにかけては明らかに形容詞 *very* である。しかし次の Stage Ⅲでは、形容詞とも副詞とも解釈されるようになる。この環境こそが副詞用法の誕生に繋がると Mustanoja（1960）は解説している。*OED* には、多機能的だと推測されている1387 -1593年までの用例が提示されている。M4期では形容詞 *VERY* と共起する名詞の割合は約67% と圧倒的に高いものの、E1期には約17% と大幅に減少している。しかし EModE 期においては、話し手が形容詞 *VERY* と名詞の共起語を使用する場合には、原義を意識しながらまだ発話を行っている可能性もある。従って E2期の初期辺りまではこの揺らぎの状態が見られることもあったのではないだろうか。*VERY* の原義と強意副詞 *VERY* の転義の距離は、そう遠くない。しかし Stage Ⅳになると、*VERY* は副詞 *VERY* として明確に解釈されるようになり、Stage Ⅴでは *VERY* の原義が薄れ、ある特別な機能を持つようになり強意副詞として完成した。[10] したがって、堀田（2017）も述べているように Stage Ⅴの Paston Letters の（5）'*Vere Hartely your Molyins*.' の Vere は 'sincirely' 程度の意味で、原義である「真実の、正真正銘の」と強意を表す転義「とても」が併存している用例だと理解したい。

### 2.3　強意化のメカニズム

前節では、現代英語における強意語の統語的並びに意味的分類、および中英語における強意副詞について概説した。しかしどのような過程を経て強意語になるのだろうか。本節では、実詞から強意語へと変化する強意化のメカニズムと、強意語の役割について見ていきたい。

乾・東・木村（1971）は、どのような原義を持つ語彙がほぼ内容のない強意語へ転移するのかに関して、内容語から強意の内容語となり、さらに強意の機能語へといった変化の過程で捉えることができるだろうと考察している。その上で基となる語（彙）には、概して以下のような意味を有する3つのタイプに分けられていると分析している。

（A）greatness, superiority, completeness, whole, simplicity, cleanness.
（B）conformity to truth or reality, certainty, affirmation.
（C）strength, excess, abnormality, wonder, fear, unpleasantness, profanity

上記のなかでも、特に俗語・口語的で盛衰の激しい情的な強意語は、感情に関係の深い（C）に属するものが多いとしている。また Partington（1993:181）も上記の乾・東・木村（1971）同様に、very, utterly のような副詞が、modal（話者の主観・判断・評価）[11]から intensifier へと変化を遂げる発達段階のプロセスを以下のように示している。

> A number of lexical items which today have an intensifying function began life with some modal semantic content, through which speakers comment on their assessment of the truth of the matter under discussion or vouch for the sincerity of their words. The most central of this group of words is the frequent *very*,[12] which originally contained the sense truly or genuinely.
>
> Partington（1993: 181）

このように、強意の機能を持つようになる語彙は、話し手の発言内容の命題が真であると言う意味を持つことを経て、強意副詞になっていく。その中でも *VERY* は中心的な強意副詞である。*VERY* は元来 'truly, genuinely' の意味を含意し、*OED* の記述（6）のような語義説明が与えられている。

（6）*OED*, *very* a., adv. n[1]
　B. †1. a Truly, really, genuinely; in or with truth or reality; truthfully.

Partington（1993）によると、*VERY* は 'utterly（全く、完全に）' という 'modal sense' を持っており、*OED* からの用例（The compyler here-of shuld translat *veray* so holy a story.（1485. *OED* Digby Mystery vol 14: 569, cited in Partington: 181））を紹介している。

先述の乾・東・木村（1971）および Partington（1993）の記述に示されるように、本論で扱う *VERY* は、(B) conformity to truth or reality, certainty, affirmation に該当すると考えられる。[13]また Stoffel（1901）をはじめ多くの研究者が述べているように、強意語は、話し手が感情を表現する際に重要な役割を果たす。しかし話し手は誇張表現を多用する傾向があり、強意語は頻用されると新鮮味がなくなり次第に効力を失っていく。そのために話し手は新しい強意表現を求める。そしてその表現も効き目が薄くなり。さらに新たな表現が欲しくなる。この欲求の原動力となっているものは、話し手が独創的でありたい、優れた話術を見せたい、聞き手の関心を惹きたいという希望や願望であろう。このように常に新陳代謝が促される強意語

は絶えずこの循環に晒され、共時的および通時的に蓄積淘汰されヴァリエーションが変容を遂げていく。同様に Peters（1994）も次のように述べている。

> ...the linguistic “trend-setters” will then normally put a new group-symbol into circulation. Such shibboleths thus tend to change rapidly; they are subject to fashion.
>
> Peters（1994: 271）

このように強意語は OE 以来次々と現れては新たに刷新されていく。しかしいつでも新しい強意語に取って代わられるというわけではない。役割を変えて残る語彙もあれば、古い強意語が新たな強意語と共存して次第に蓄積されて多種多様な強意語の類義語群の一つになる語彙もある。またある特定の話し手のグループのみに好んで用いられる、特徴的な表現方法としての合言葉（shibboleths）としての働きを持ち、‘group identification’ のシンボルとして役割を果たす。次節では、強意副詞 *VERY* の多様化と *FULL, RIGHT* のふるまいの関係について、特に3.2.2以下社会言語学的分析を取り入れて量的検証を行った結果を示す。

## ３．調査と結果

ME における強意語の修飾対象を限定するに当たって、例えば異形や同音同綴異義語が多いために、語形や統語環境からも形容詞と副詞の判別がつかない場合があり、判断が非常に微妙な用例も多くみられた。特に韻文では語順がより柔軟になるために、こうした状況が極めて生起しやすい。本節では、*Helsinki Corpus* を用い、EModE までの *VERY* の発達過程と *FULL, RIGHT* の関係に着目し、次の調査を行った。

(i) M3期 -E3期における *FULL, RIGHT, VERY* の推移分析
(ii) M4期・E1期における強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* + 形容詞分析
　(ii)-1 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のコロケーション分析
　(ii)-2 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のテクストタイプ分析
　(ii)-3 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のテクストタイプの類似性分析
　(ii)-4 同一テクストタイプ内における共通コロケーション分析
(iii) M4期・E1期における強意副詞 *VERY* 分析

### 3.1 M3期―E3期における *FULL, RIGHT, VERY* の推移分析

本節では、まず *FULL, RIGHT, VERY* と共起する形容詞及び副詞の用例を調査対象とし、M3期から E3期にわたる全てのファイルについて出現状況を検証し推移分析を行った。以下の表3には、それぞれの出現数（上段）と10,000語当たりの出現率（下段）の数値が示されている。

表３　M3-E3における full, right, very 生起数と10.000語当たりの出現率

| | | M3 | | M4 | | E1 | | E2 | | E3 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| full | +Adj | 140 | (7.57) | 103 | (4.73) | 7 | (0.37) | 1 | (0.05) | 0 | (0.00) |
| | +Adv | 98 | (5.30) | 94 | (4.32) | 7 | (0.37) | 0 | (0.00) | 0 | (0.00) |
| | 計 | 238 | (12.86) | 197 | (9.05) | 14 | (0.74) | 1 | (0.05) | 0 | (0.00) |
| right | +Adj | 50 | (2.70) | 115 | (5.28) | 45 | (2.37) | 13 | (0.69) | 8 | (0.46) |
| | +Adv | 41 | (2.22) | 71 | (3.26) | 19 | (1.00) | 0 | (0.00) | 1 | (0.06) |
| | 計 | 91 | (4.92) | 186 | (8.55) | 64 | (3.36) | 13 | (0.69) | 9 | (0.52) |
| very | +Adj | 1 | (0.05) | 21 | (0.97) | 127 | (6.68) | 178 | (9.44) | 292 | (16.94) |
| | +Adv | 0 | (0.00) | 1 | (0.05) | 42 | (2.21) | 76 | (4.03) | 123 | (7.14) |
| | 計 | 1 | (0.05) | 22 | (1.01) | 169 | (8.89) | 254 | (13.48) | 415 | (24.08) |

西村（2009）[14]も検証しているように、表3から強意副詞の出現率が全体的に低いことが言える。またこの表から、E1期の際立った変化を観察できる。これまでの先行研究で述べられている通り、確かに *VERY* の出現頻度がE1期に急増している反面、*FULL* の衰退はE1期以降、*RIGHT* の衰退はE2期以降歴然としている。個別にみると、M3期において最も出現頻度が高い *FULL* [15]は、M4期になると出現頻度が高くなった *RIGHT* とほぼ同等レベルに使用されていたようだ。しかしE1期になると激減し、E2期以後には観察されない。また *RIGHT* は、M4期で最も高出現頻度になるも、E1期になると2分の1以下にまで減少し、E2期も減少の一途をたどり E3期の出現頻度は極めて少ない。一方 M4期ではわずかな出現頻度に過ぎなかった *VERY* は、E1期で急激に増加し、飛躍的に出現頻度が高くなっていく。これらの検証結果は、これまでの先行研究の調査と合致している。*VERY* は16世紀はじめには一般化され *FULL, RIGHT* を圧倒していったということである。しかしながら、過去の研究においてこれら3つの強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* には、強意副詞としての類似性、さらにそれらが互いに競合関係にあったと考えられるという見解が示されることもあり、さらに検証が必要である。また過去の研究で述べられているように、E2期以降の *VERY* の出現頻度の急増と *FULL, RIGHT* の衰退との関連性ははっきりしていない。本研究では、これらの3つの強意副詞と共起する形容詞に焦点を当てるため、先述の表3から、共起する形容詞のみを抽出し下記の表4に再度示す。

表４　HC における full, right, very ＋形容詞の10,000語あたりの出現率

| | full+Adj | | right+Adj | | very+Adj | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| M3 (185,017) | 140 | (7.57) | 50 | (2.70) | 1 | (0.05) |
| M4 (217,610) | 103 | (4.73) | 115 | (5.28) | 21 | (0.97) |
| E1 (190,207) | 7 | (0.37) | 45 | (2.37) | 127 | (6.68) |
| E2 (188,489) | 1 | (0.05) | 13 | (0.69) | 178 | (9.44) |
| E3 (172,361) | 0 | (0.00) | 8 | (0.46) | 292 | (16.94) |

表4を概観する限り、M3の *FULL* から M4の *RIGHT*、E1の *VERY* へと、これまでの過去の先行研究に示されているように、*FULL* から *RIGHT* に、次に *VERY* が強意語の役割を引き継いで行っているように見える。*VERY* の出現率に注目すると、M4期からE1期にかけて約6倍の増加である。本節で得られた結果から、確かに M4期から E1期において *VERY* と共起する形容詞・副詞の急増により強意副詞 *VERY* は多様化しているようである。しかし強意副詞 *VERY* は、どのように多様化していったのか、次節では、M4期・E1期

における *FULL*, *RIGHT*, *VERY* がそれぞれに収録されているテクストファイルと共起する形容詞にフォーカスし、用例調査を行った結果を記述する。

### 3.2　M4期・E1期における強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* + 形容詞分析

#### 3.2.1 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のコロケーション分析

前節では、M3期 -E3期にわたる全てのファイルについて *FULL*, *RIGHT*, *VERY* とそれぞれの語彙が共起する形容詞・副詞の用例の出現状況を調査した。M4期の *FULL*, *RIGHT*, *VERY* と共起する形容詞のコロケーションにはそれぞれどの程度の影響がみられるのか。本節では M4期・E1期に焦点をあて、実際にどの程度の語種数と共通しているのかについて次の7点の調査を行った。

(i)　M4期 *FULL*, *RIGHT*, *VERY* のコロケーション比較検証
(ii)　M4期 *FULL* および *VERY* のコロケーション比較検証
(iii)　M4期 *FULL* および E1期 *VERY* のコロケーション比較検証
(iv)　M4期 *RIGHT* および *VERY* のコロケーション比較検証
(v)　M4期 *RIGHT* および E1期 *VERY* のコロケーション比較検証
(vi)　M4期 *FULL* および *RIGHT* のコロケーション比較検証
(vii)　M4期 *FULL* および E1期 *RIGHT* のコロケーション比較検証

検証 (i) の三語共に共起した共通の形容詞タイプを (7) に示す。驚くべきことに共通して共起しているのは僅か4タイプの形容詞のみである。次に (ii) の比較検証では、(8) (9) に *FULL* と *VERY* のそれぞれに共起する形容詞タイプを、(10) には *FULL*, *VERY* に共起した共通の形容詞タイプ、(11) には M4期 *VERY* と共起せず M4期 *FULL* と共起する形容詞タイプを示す。

(7) M4期 *FULL*, *RIGHT*, *VERY* 三語と共起する共通の形容詞 (4タイプ)
glad, good, great, true

(8) M4期 *FULL* と共起する形容詞 (66タイプ (103 token))
abhominable, able, bare, bitter, blissful, bright, contagious, convenient, craftly, cursed-hearted, dear, earnest, fair, far, fine, many, fervent, gastful, glad, glorious, good, gracious, great, grefeous, hard, high, holy, homily, ill, joyful, large, loath, lovely, liking, merciful, marvelous, merry, necessary, nervous, needful, old, on-trosty, perilous, poor, profitable, ruinous, rife, sakles, sare, sharp, simple, small, sore, sorry, tethee, true, tyte, ungoodly, venomous, vnrid, wa, weary, womanly, wonderful, worshipful, wrothe,

(9) M4期 *VERY* と共起する形容詞 (13タイプ (21 token))
busy, heavy, faithful, glad, good, great, graunte,
just, red, prone, soothfast, true, wise

(10)　M4期 *FULL* ならびに M4期 *VERY* と共起する共通の形容詞 (4タイプ)
glad, good, great, true

（11）　M4期 *VERY* と共起せず M4期 *FULL* と共起する形容詞（62タイプ）

abhominable, able, bare, bitter, blissful, bright, contagious, convenient, craftly, cursed-hearted, dear, earnest, fair, far, fine, many, fervent, gastful, glorious, gracious, grefeous, hard, high, holy, homily, ill, joyful, large, loath, lovely, liking, merciful, marvelous, merry, necessary, nervous, needful, old, on-trosty, perilous, poor, profitable, ruinous, rife, sakles, sare, sharp, simple, small, sore, sorry, tethee, tyte, ungoodly, venomous, vnrid, wa, weary, womanly, wonderful, worshipful, wrothe,

（8）（9）（10）（11）を図にしてみると、以下の図1のようになる。

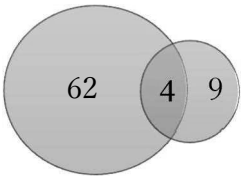


図 1　M4 full vs.M4 very

調査の結果 M4 期の *VERY* は4/13タイプと、30.8% の語彙が同時期の *FULL* と共起する形容詞と共通していることになる。しかし *FULL* は4/66タイプと三語共通の形容詞のタイプと同じ glad, good, great, true のみである。同時代にあまり共通して用いられていないようだ。では M4期 *FULL* の形容詞のコロケーションは、どの程度 E1期 *VERY* に引き継がれて使用されているのか。検証（iii）として M4期 *FULL* の 66タイプの形容詞（8）と E1期 *VERY* の70タイプの形容詞（13）を比較すると、M4期 *FULL* の22（18+4タイプ（glad, good, great, true））タイプの形容詞（14）が共通して用いられており、48タイプの形容詞（15）とは共起していないことが分かった。（15）は既に英語に借入された語彙、若しくは本来語、ゲルマン語およびノルド語である。にもかかわらず M4期 *FULL* との共起は見られない。一方 fertile, elegant, chargeable は、E1期 *VERY* に共起したフランス語およびラテン語（以下：ロマンス語）由来の形容詞であるが、これらは M4期には *Helsinki Corpus* にはまだ出現していない語彙である。

（12）　E1期 *VERY* と共起する形容詞（70タイプ（127 tokens））

ambitious, auncient, busie, chargeable, cleane, colde, commendable, couetous, dangerous, deare, desirouse, elegant, est, fair, farre, feared, fertile, feruent, fine, first, foule, general, gentle, glad, good, great, hard, high, homly, honest, ill, large, lothe, many, meane, meete, mery, necessary, new, notable, noyous, noisome, olde, perfytte, pillous, playne, plesant, pretye, profitable, red, rich, ryghte, rype, same, seke, self, small, sorye, soure, straunge, stronge, sure, thycke, towarde, true, unlike, virtuous, vnable, weake, well

（13）（8）の M4期 *FULL* ならびに E1期 *VERY* と共起する共通の形容詞（22タイプ）

deare, fair, far, fine, feruent, glad, good, great, hard, high, homly, ill, large, lothe, many, mery, necessary, old, profitable, small, sorry, true

（14）　M4期 *FULL* と共起せず E1期 *VERY* と共起する形容詞（48タイプ）

ambitious, auncient, busie, chargeable, cleane, colde, commendable, couetous, dangerous, desirouse, elegant, est, feared, fertile, first, foule, general, gentle, honest, meane, meete, new, notable, noyous, noisome, perfytte, pillous, playne, plesant, pretye, red, rich, ryghte, rype, same, seke, self, soure, straunge, stronge, sure, thycke, towarde, unlike, virtuous, vnable, weake, well

（15） M4期 *FULL* と共起するも E1期 *VERY* と共起しない形容詞（44タイプ）

abhominable, able, bare, bitter, blissful, bright, contagious, convenient, craftly, cursed-hearted, earnest, gastful, glorious, gracious, grefeous, holy, joyful, lovely, liking, merciful, marvelous, nervous, needful, on-trosty, perilous, poor, ruinous, rife, sakles, sare, sharp, simple, sore, tethee, tyte, ungoodly, venomous, vnrid, wa, weary, womanly, wonderful, worshipful, wrothe,

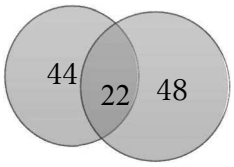


図２ M4 full vs. E1 very

（8）（12）（13）（14）（15）を上記のように図にすると図2のようになる。調査の結果、E1期 *VERY* は M4期の *FULL* から31.4% ほど引き継いでいることが確認された。また *FULL* と共通しない（15）の50% はロマンス語からの借用語である。

次に検証（iv）の M4期 *VERY* と *RIGHT* の場合とを比較する。6タイプ（46%）の形容詞 glad, good, great, true, heavy, wise が共通して共起している。比較した結果を上記同様に図に示すと、図3のようになる。

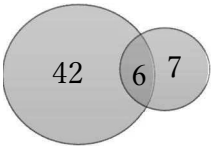


図３ M4 right vs. M4 very

同様に検証（v）として、図4のように M4期 *RIGHT* の48タイプの形容詞と E1期 *VERY* の70タイプの形容詞を比較すると、E1期 *VERY* のコロケーションのタイプは M4期から5倍強に増加したにもかかわらず引き継がれた形容詞は8タイプ増加の14タイプ（glad, good, great, true, fair, hard, high, honest, merry, necessary, seke, sorry, strong, well）と20% に過ぎない。さらに M4期の *FULL* と *RIGHT* の場合とを比較する。19タイプの形容詞（glad, good, great, fair, bare, bitter, hard, high, holy, joyful, merry, necessary, perilous, sore, sorry, true, weary, worshipful, wroth）が共通して共起している。しかし E1期の *RIGHT* と共起する形容詞のタイプ数は M4期の約2分の1に減少し、共通した形容詞のタイプも約2分の1（glad, good, great, fair, high, holy, simple, weary, worshipful）になっている。加えて検証（vi）（vii）として、M4期 *FULL* と M4期 *RIGHT* および M4期 *FULL* と E1期 *RIGHT* を比較した。その結果を上記同様に、以下に図5、6として示す。

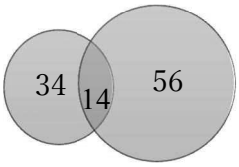


図４ M4 right vs. E1 very

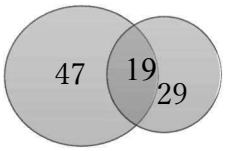


図５ M4 full vs. M4 right

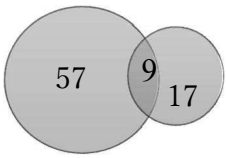


図６ M4 full vs. E1 right

以上 *FULL*, *RIGHT*, *VERY* と共起する共通の形容詞のタイプを観察した。一見すると、明らかに共通して共起した語彙が見られた。しかし次に共通して共起していない M4期 *FULL*（15）および E1期 *VERY* コロケーション（14）に注目すると、興味深い結果が見られた。以下の語彙は、E1期 *VERY* には引き継がれなかった M4期 *FULL* と共起する形容詞のタイプの一部である（15）。これらは廃語もしくは廃用になっている。

lykynge（†liking, adj.1 OE）, nedfull（needful, adj.1 and n. † needful, adj.2 OE）, sakles（sackless, adj. c950 † 1 1301）, ungodely（† un'goodly, adj. 1390-1530 2. b. Of actions, language, etc.）, venomous venomous, adj.（† 1. fig. Morally or spiritually hurtful or injurious;）, pernicious.（Obsolete.c1290- 1610）, tethee（teethy, adj.1a1500-1892）vnrid（† unride, adj.?c1200-a1500）, † craftly（adj.a1000- a1492）

*OED* にも tethee（teethy, adj.1 a1500-1892）の初出例として記載されている用例（She is *full tethee*, For litill oft angré; If any thyng wrang be, Soyne is she wroth. [M4 Drama mystery Towneley Plays（a1460）: 168583 ]）であるが、今日ではスコットランド及び北部地方においての方言であるとされている。また廃語になった vnrid（† unride, adj.: ?c1200-a1500）に関しても、*OED* にも同じ用例（Man..Was put out in þat tyde, In wo and wandreth for to be, In paynes *full vnrid* To knowe. [M4 Drama mystery: Towneley Plays（a1460）: 168407]）が見られる。さらに gastful, grefeous, cursed-hearted, on-trosty, perilous, ruinous, rife, sare, venomous, wa, womanly, wrothe, contagious は、廃用もしくは古風である。

加えて、ロマンス語の語彙が増加している。*Helsinki Corpus* においては、M4期 *FULL* は15/66タイプ（22.7%）とまだ少ないが、M4期 *VERY* の共起語の4/13タイプ（31%）、M4期 *RIGHT* の17/48タイプ（35.4%）、E1期の *VERY* と共起する形容詞の27/70タイプ（39%）と増加している。また接辞もわずかながら見られるようになり、ontrusty（untrusty）, unable など派生語が観察されるようになってきた。このことは話し手が用いる語彙に変化がみられるようになったことを示唆するものである。そのためにその語彙と *FULL* や *RIGHT* には親和性が低く、*VERY* に替わっていったとも推測される。

本節では *FULL*, *RIGHT*, *VERY* と共起した形容詞のタイプを観察した。確かに（7）や（9）（13）に見られるように、テクストタイプを考慮せずに語彙全体でみると、good, great, glad, true など評価を表す形容詞には強意副詞が共起しているので、明らかに *FULL*, *RIGHT*, *VERY* は共に強意副詞と考えられる。しかし、ただこれら上記の形容詞と共起しているという理由で *VERY* が多様化しているということを指し示すものではない。次節では、テクストタイプに注目し、具体的にどの程度の類似性が見られるかについて社会言語学的視点から調査する。

### 3.2.2 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のテクストタイプ分析

本節では、ジャンル別のテクストタイプに注目した調査結果を、続いて同一のテクストタイプ内における個々の強意副詞 *FULL*, *RIGHT*, *VERY* を詳細に観察した結果を示す。表5は、先述の表4を基に M4期および E1期に分け、それらを合わせたものの出現頻度の高い語彙順にテクストタイプを示したものである。表6は、表4に基づき10,000語あたりの出現率を算出したものである[16]。また表6に基づき M4期・E1期の出現率を 図（1）（2）に示した。なお各テクストタイプの上位には、（a）statutory（法令：法律・文書）、（b）secular instruction（非宗教的教訓：手引書・科学（天文学・医学）・哲学・教育学論文）、（c）religious instruction（宗教的な教訓：宗教学論文・訓戒・規則・前口上・説教）、（d）expository（解説：科学（天文学・医学・その他・教育学論文））、（e）nonimaginative narration（非文学叙述：歴史・伝記（聖人の生涯・自伝・その他）・宗教学論文・ME 非宗教的抒情詩・旅行記・日記）、（f）imaginative narration（文学叙述：小説・騎士物語・旅行記・地理）の6つのカテゴリーに分類されている。なお（g）の X には聖書・宣誓供述書・演劇など、時代が一期以上に亘り継続しているものが示されている。

表５　M4期・E1期における full, right, very のテクストタイプ別出現頻度

| テクストタイプ | M4 | | | | E1 | | | | Token |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 総数 | full | right | very | 総数 | full | right | very | |
| Letter private | 19,577 | 5 | 55 | 6 | 10,629 | | 16 | 12 | 94 |
| Letter non-private | 3,206 | | 6 | | 6,299 | | 10 | 3 | 19 |
| Religious treatises | 41,596 | 23 | 15 | 1 | 0 | | | | 39 |
| Sermon | 26,302 | 8 | 5 | 4 | 9,930 | | | 6 | 23 |
| Preface | 6,188 | 2 | 5 | 2 | 0 | | | | 9 |
| Law | 10,995 | | 3 | 2 | 11,680 | 4 | | 5 | 14 |
| Handbook other | 11,713 | 2 | | 4 | 10,116 | | | 15 | 21 |
| History | 12,748 | 3 | | 2 | 11,034 | | | 7 | 12 |
| Travelogue | 0 | | | | 14,215 | | 13 | 24 | 37 |
| Drama comedy | 0 | | | | 10,541 | 3 | 1 | 6 | 10 |
| Drama mystery | 20,181 | 32 | 5 | | 0 | | | | 37 |
| Romance | 19,105 | 8 | 9 | | 0 | | | | 17 |
| Diary private | 0 | | | | 13,188 | | 1 | 3 | 4 |
| Fiction | 8,617 | | 1 | | 11,348 | | | 9 | 10 |
| Bible | 4,121 | | | | 21,137 | | | 4 | 4 |
| Educational treatises | 0 | | | | 10,366 | | | 4 | 4 |
| Biography autobiograp | 0 | | | | 5,749 | | | 4 | 4 |
| Biography other | 0 | | | | 5,491 | | | 7 | 7 |
| Proceeding trial | 0 | | | | 16,048 | | | 10 | 10 |
| Philosophy | 0 | | | | 9,880 | | 3 | 8 | 11 |
| Science other | 0 | | | | 6,342 | | 1 | | 1 |
| Biography saint | 3,828 | 13 | 3 | | 0 | | | | 16 |
| Document | 10,441 | 1 | 7 | | 0 | | | | 8 |
| Handbook astronomy | 2,977 | | 1 | | 0 | | | | 1 |
| Handbook medicine | 5,814 | 2 | | | 0 | | | | 2 |
| Rule | 1,845 | 1 | | | 0 | | | | 1 |
| Science medicine | 6,385 | 3 | | | 6,214 | | | | 3 |
| Proceedings, depositio | 1,971 | | | | 0 | | | | 0 |
| 総　計 | 217,610 | 103 | 115 | 21 | 190,207 | 7 | 45 | 127 | 418 |

表６　M4期・E1期 full, right, very のテクスト別10,000語あたりの出現率

| テクストタイプ | M4 | | | E1 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | full | right | very | full | right | very |
| Letter private | 2.55 | 28.09 | 3.06 | - | 15.05 | 11.29 |
| Letter non-private | - | 18.71 | - | - | 15.88 | 4.76 |
| Religious treatises | 5.53 | 3.61 | 0.24 | - | - | - |
| Sermon | 3.04 | 1.90 | 1.52 | - | - | 6.04 |
| Preface | 3.23 | 8.08 | 3.23 | - | - | - |
| Law | - | 2.73 | 1.82 | 3.42 | - | 4.28 |
| Handbook other | 1.71 | - | 3.42 | - | - | 14.83 |
| History | 2.35 | - | 1.57 | - | - | 6.34 |
| Travelogue | - | - | - | - | 9.15 | 16.88 |
| Drama comedy | - | - | - | 2.85 | 0.95 | 5.69 |
| Drama mystery | 15.86 | 2.48 | - | - | - | - |
| Romance | 4.19 | 4.71 | - | - | - | - |
| Diary private | - | - | - | - | 0.76 | 2.27 |
| Fiction | - | 1.16 | - | - | - | 7.93 |
| Bible | - | - | - | - | - | 1.89 |
| Educational treatises | - | - | - | - | - | 3.86 |
| Biography autobiography | - | - | - | - | - | 6.96 |
| Biography other | - | - | - | - | - | 12.75 |
| Proceeding trial | - | - | - | - | - | 6.23 |
| Philosophy | - | - | - | - | 3.04 | 8.10 |
| Science other | - | - | - | - | 1.58 | - |
| Biography saint | 33.96 | 7.84 | - | - | - | - |
| Document | 0.96 | 6.70 | - | - | - | - |
| Handbook astronomy | - | 3.36 | - | - | - | - |
| Handbook medicine | 3.44 | - | - | - | - | - |
| Rule | 5.42 | - | - | - | - | - |
| Science medicine | 4.70 | - | - | - | - | - |
| Proceedings, depositions | - | - | - | - | - | - |
| 総　計 | 4.73 | 5.28 | 0.97 | 0.37 | 2.37 | 6.68 |

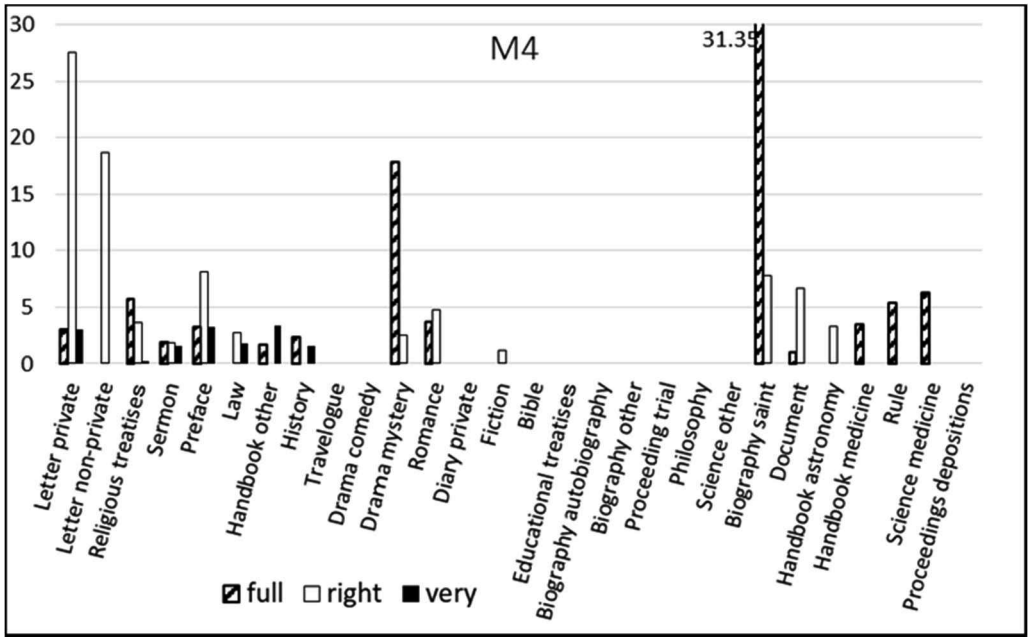



図７　M4期における full, right, very

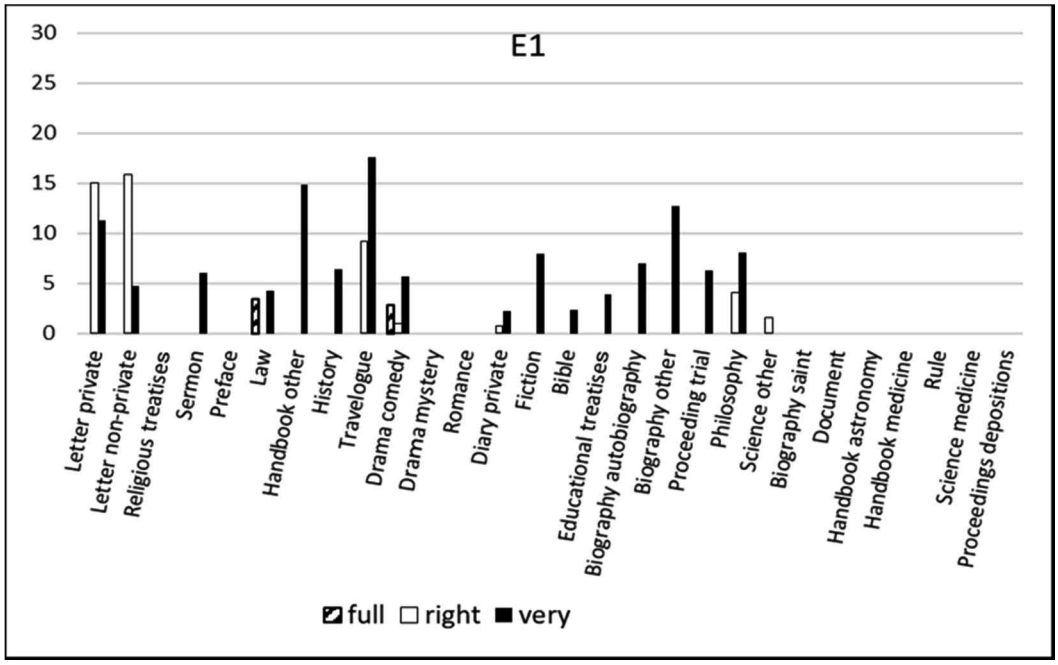



図８　E1期における full, right, very

*VERY* は宗教関係のなどのテクスト religious trestise や sermon において出現率が低いものの、letter private や handbook other のテクストでは、*FULL* よりも高出現率で平均して出現する。また *FULL* は law には見られない。しかも *FULL* の letter private への出現率が少ないことが少々疑問である。さらに *RIGHT* は、handbook other や history のテクストには見られないことから、*VERY* と比較すると、M4期の *FULL* や *RIGHT* はテクストタイプの出現率に偏りが見られるようだ。M4期では、*FULL* は13タイプ、*RIGHT* は12タイプのテクストファイルに分布しているものの、E1期では *FULL* はわずか2タイプ、*RIGHT* は7タイプのテクストファイルにまで減少している。

一方 *VERY* は、M3期に共起する形容詞が (b) secular instruction に分類された handbook astronomy に1タイプのみであった。しかし M4期には一気に7タイプのテクストに、E1期になると約2倍の16タイプのテク

ストにまでに共起し拡散している。しかもM4期の *VERY* は出現頻度が *FULL, RIGHT* の約1/5に過ぎないにもかかわらず、出現しているテクストタイプは1/2強にまで分布している。*VERY* を観察すると、*FULL* や *RIGHT* ほど出現しないものの、(d) expository、(f) imaginative narration 以外の上位カテゴリーにすでに分布している。このことから *VERY* はM4期には広範囲に分布していると考えられ、出現率は高くはないが、多様化しつつあると言えそうだ。もはや *VERY* は私的な書簡のテクストの中に留まってはいないようだ。M4期の時代は、前述した（c）や（e）並びに（g）のテクストファイルの中には、宗教に関するテクストファイルが多く見られるが、*VERY* の出現率は低い。

しかしE1期になると、*VERY* はM4期には見られなかったカテゴリーにも見られるようになった。テクストタイプで見ると、教育や医学書[17]、裁判記録、旅行記などのファイルにも *VERY* が出現するようになり、さらに広範囲な使用がみられるようになったと考えられる。*FULL* はM4期に science medicine には出現していたが、E1期においては見られないようになり、替わって *VERY* が観察されるようになった。*VERY* は既出のテクストタイプ以外の出現率は高くないものの多様化したと言えそうである。

### 3.2.3 強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* のテクストタイプの類似性分析

M4期からE1期になると、テクストタイプに変化が見られるようになる。表7に見られるように、M4期には（c）(e)（g）の中に宗教的なカテゴリーのテクストファイルが多く見られたが、E1期になると、宗教的なカテゴリーでは sermon のみになる。一方（e）のノンフィクションの部門にテクストファイルが増え、今まで見られなかった（b）に教育に関するファイルや（g）に哲学が登場するようになる。またM3期までは、書簡は letter non-private しか見られなかったが、M4期になると letter private も登場する。[18]

表７　Helsinki Corpus におけるテクストタイプ分類

| Prototypical Text category | Text type | |
|---|---|---|
| | **M4** | **E1** |
| (a) Statutory | Law | Law |
| (b) Secular instruction | Handbook : medicine | Handbook : other |
| | Handbook : other | |
| | Handbook : astronomy | |
| Secular instruction Expository | | Education |
| (c) Religious instruction | Sermon | Sermon |
| | Rule | |
| | Religious treatise | |
| (d) Expository | Science medicine | Science |
| (e) Nonimaginative narration | History | History |
| | Biography : life of saint | (Auto) biography |
| | | Diary |
| | | Travelogue |
| (f) Imaginative narration | Fiction | Fiction |
| | Romance | |
| | Travelogue | |
| (g) X | Drama : mystery play | Comedy |
| | Proceeding: deposition | Proceeding: trial |
| | Private letter | Correspondence: Private |
| | Official letter | Correspondence:Official |
| | Bible | Bible |
| | Preface | |
| | Document | |
| | | Philosophy |

数多くのテクストタイプの中で、強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* が共通して出現しているテクストファイルは、M4期では（f）の private letter,（c）の religious treatise, sermon,（a）の preface の4タイプ、E1期で

は（g）の drama comedy の1タイプに観察されるのみである。この中で最高出現頻度を示すテクストタイプの（g）correspondence（書簡）に分類される M4期の letter private（私的書簡）には特筆すべきものがある。Peters（1994: 273）は、このテクストは書き言葉でありながら、話し言葉に近い性格を持つ強意表現のような口語の文体が見られるようになったので、流行りの強意表現の変化を観察するのに有用性があると考察している。先述の表5・6に示されたように、このテクストでは、*RIGHT* の絶対頻度は115例中55例（出現率28.09）と最多である。それに対し *FULL* は103例中5例（出現率 2.55）のみであり、*VERY* の21例中6例（出現率3.06）よりも少ない。同様の強意副詞であれば、この書簡のファイルに *FULL* の用例数がより多く観察されてもよいはずであるが、*FULL* の用例数の少なさには疑問が生じるところである。次の（16）は M4期の letter private に収録されている書簡である。

（16）　M4期 Private letter
　　Shillingford 家
　　Paston 家　（第二世代 : 母）Margaret,（第三世代 : 兄弟）John, Clement
　　Stonor 家　Mull, Betson, Elisabeth[19]
　　Cely 家　George, Richard（The younger）

Peters（1994）によると、15世紀の書簡を観察して、未だ依然保守的ではあるものの、年齢の差によって使用する強意副詞の違いが若干見られるというものである。それは女性と一番若い世代の書き手 / 送り手にのみ変化が見られる。これは *VERY* の到来を告げるものであり、性別の違いによる関係性も明らかになって来た。このようにレパートリーが増え出現率も高くなってきたと考察している。*Helsinki Corpus* を綿密に調査した限りにおいても用例数は少ないが同様の結果が見られた。観察の結果、以下の点が検証された。

稲津（2001）によると、Stornor 家書簡は1470-1480年の間に書かれている。（16）の9例中3例に2人の女性による *VERY* の用例が観察された。Elisabeth Stornor の私的書簡に2例の形容詞の用例（17）（18）が見られた。しかし少し時代を遡ると Paston 家第二世代目の Margaret Paston の書簡にはまだ形容詞と共起する副詞 *VERY* の用例は見られず、名詞と共起する形容詞 *VERY* の用例が1例見られた。9例中5例に若い世代の男性 Betson Stonor による、形容詞と共起する副詞及び名詞と共起する形容詞 *VERY* の使用が見られた。その他の男性には *RIGHT* の共起しか見られない。これは Peters（1994）の、第一世代の年配の男性 William Paston 1世には *VERY* は用いられていないという考察と一致している。

（17）　.. y ladye his Modyr. And trewly me thowght it was a *very good* syght. And sire, I was with my lady of..... .
[M4 Elisabeth Stornor: 172966]

（18）　..spokyn to hyr ffor the money, but trwly sche was *very besy* to make hyre redy,ffor sche is redyne t....
[M4 Elisabeth Stornor: 172972]

しかし三川（2013）によると、この時代の女性の書簡は殆どが口述筆記によるものとされている。[20]さらに religious treatise の The book of Margery Kempe に以下の（19）の形容詞の用例および3例の名詞の用例が見られる。

（19）　...piracyon of owyr Lord was be experiens preuyd for *very sothfast* and sekyr in the forseyd creatur. Af.....
[M4 Margery Kempe: 157487]

このM. Kempの陳述も僧職者による口述筆記であったことが分かっている。いずれの場合も口述筆記であるとはいえ、女性が *'very good, very besy, very sothfast'* と実際に発話して表現をした可能性があるという点においては画期的で新しい試みであったと推察される。歴史社会言語学的な観点からも、今後の研究の手がかりとなるものと考えられる。ただしこのKempeのファイルには、形容詞用法として9例の *FULL* および10例の *RIGHT* の例が見られる。一様に口述筆記ということであるが、実際の書き手が男性なため *FULL* および *RIGHT* の用例が多いという可能性もあるかもしれない。確かに、このテクストには強意副詞 *FULL, RIGHT, VERY* は全て出現している。また興味深いことに、*MED* にSche dede no þing wryten but sche knew *rygth wel* for *very* trewth. というM. Kempeの例文（Add 61823 : a1438）が引用されている。中英語期の強意語がここにすべて出現している。というものの、やはり三語共通のコロケーションは観察されなかった。共通して出現するテクストタイプが少ないばかりか、それぞれの強意副詞には、性質あるいは機能に若干の相違があることが示唆された。次節では、同一テクストタイプ内のコロケーションに注目し、どの程度の類似性が見られるかについて調査を行う。

### 3.2.4 同一テクストタイプ内における共通コロケーション分析

テクストタイプを考慮せずに *FULL, RIGHT, VERY* と共起する形容詞のタイプを観察した結果、共通したコロケーションが20% から46% 程の範囲で観察され、*FULL* および *RIGHT* が *VERY* の多様化と多少なりとも関係あると言えそうだ。しかしジャンル別のテクストタイプを考慮すると、共通のテクストファイルは数少ないものであった。本節では数少ない共通のテクストタイプ内の共通のコロケーションを観察するために以下3点の詳細な比較分析を行う。

(i) M4期の *FULL, RIGHT, VERY* の同一テクスト内共通形容詞比較分析
(ii) E1期の *FULL, RIGHT, VERY* の同一テクスト内共通形容詞比較分析
(iii) M4期・E1期の *FULL, RIGHT, VERY* の同一テクスト内共通形容詞比較分析

表8はM4期の強意副詞 *RIGHT* および *VERY*、*FULL* 及び *VERY*、*FULL* 及び *RIGHT* を検証し、それぞれ共通するテクストタイプとそのテクスト内に見られる共通の形容詞タイプを比較検証した (i) の結果である。

表８　M4期の full, right, very の同一テクスト内共通形容詞タイプ比較分析

| | M4 very | | M4 right | |
|---|---|---|---|---|
| M4 right | M4 rightとM4 very 同一テクスト5<br>Letter private,<br>Religious treatise,<br>Sermon,<br>Preface,<br>Law, | M4 rightとM4 very同一テクスト内共通形容詞 1<br>Letter private　(good, grete, hevy) | | |
| M4 full | M4 fullとM4 very 同一テクスト6<br>Letter private,<br>Religious treatise,<br>Sermon, Preface,<br>Handbook other,<br>History, | M4 fullとM4 very 同一テクスト内共通形容詞 0 | M4 fullとM4 right 同一テクスト9<br>Letter private,<br>Religious treatise, Sermon,<br>Preface, Handbook other,<br>Drama mystery, Romance,<br>Biography saint, Document | M4 fullとM4 right 同一テクスト内共通形容詞 4<br>Religious. Treatise (good, glad)<br>Biography. Saint (holy)<br>Drama mystery (good)<br>Romance (glad) |

*VERY* と *RIGHT* は5タイプのテクストに共通している。しかし同一テクストタイプ内の共通コロケーションは、letter privateに見られるのみである。letter privateで高出現率の *RIGHT* に注目すると、(20) や (21) に見られる書簡の冒頭や結びの表現としての出現率が顕著である。これは定型表現（set formula）であり、honorable, singular, trusty, well-beloved, reverent, worshipful などといったいわば化石化した表現と共起する例が相当数見受けられる。稲津（2001）によると、初期の通信文は当時の専門家（写字生、書記）

の手によることが多く、レターの書式やスタイルには傾向が見られる。新井（2001）は細部に違いが見られるものの、一定のパターンに従って構成されていたと考察している。一般に広まると、社会階層によらず殆どの人々が専門家の書いた書式や表現をまねたものと思われる。このことから、34/56トークン[21]もの定型表現の際に共起する形容詞が相当数見られても当然である。なお（21）で使用されている synguler は、*OED* によると1485年から用いられるようになり1638年（E2期）には廃語もしくは obsolete になっている。差出人 Betson Stonor は、（21）では妻宛てに、（22）では cossen（親類）宛てに書いているものであり、使い分けを行っている。新井（2002）によると、当時の手紙を書く者は、その手紙を受け取る者との関係を、手紙の冒頭で明確に示す必要があり、身分・階層序列にふさわしい挨拶部分を書くルールに従っていた。頼み頼まれること（service）がある場合には、書簡のあいさつ部分を意図的に書式から逸脱させたらしい。

（20）　..Paston, your broder *Ryght worshypfull* brothyre, I recomawnde me to go.....
[M4: PRIVTE LETTER: Clement Paston: 171725]

（21）　To the right honorable and my *right Synguler good* lady, Dame Elisabeth Stonore, ....
[M4: PRIVTE LETTER: Betson Stonor:173463]

（22）　..hanndes and all ffeete with Godes grace. My *veray ffeigtheffull* Cossen, I trust to you that t...
[M4: PRIVTE LETTER: Betson Stonor:173325]

稲津（2001, 2002）によると、*RIGHT* は次第に仰々しい表現として、年上あるいは目上に対しての表現になる。

一方 *VERY* は丁寧表現になると説明し、したがって *RIGHT* と *VERY* はこの定型表現においても機能分担が示唆される。[22] 他のテクストに見られる *FULL* や *RIGHT* と共起している評価を表す形容詞が、書簡のテクストで *VERY* にも共起するようになって来たので、書簡のテクストにおいて、*VERY* は多様化しつつあると分析している過去の研究があり、確かに一理はある。もし同様の強意副詞であれば、この書簡のテクストに定型表現以外の形容詞が *FULL* と *RIGHT* にも共起しているはずである。しかし M4期 letter private において共通している形容詞は、*VERY* と *RIGHT* のみで good, grete, hevy にわずか1例ずつみられるだけである。しかし *VERY* と *FULL* には共通しているコロケーションは1例も見られない。

一方 *FULL* と *RIGHT* は9タイプのテクストに共通し、共通のコロケーションは4タイプのテクストに見られる。その中で drama mystery（神秘劇）は、M4期の *FULL* において高出現率を示しているテクストである。これは聖書を題材とした戯曲集であり、*Helsinki Corpus* には以下の5作品が収集されている。下記の（23）-（27）の出現状況をみると確かに *VERY* も同テクスト内に見られる。しかしこれら作品の計9例は、全て名詞を修飾する形容詞 *VERY* である。*RIGHT* は5/38トークンのみ、*FULL* は *RIGHT*, *VERY* に比較すると突出しており38/82トークンが形容詞と共起している。それにもかかわらず、drama mystery における *FULL* と *RIGHT* の共通したコロケーションは good1例のみである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （23） | Digby Plays | full 1, | right 7, | very 1 |
| （24） | Ludus Coventriae | full 5, | right 12, | very 1 |
| （25） | Mankind | full 5, | right 5, | very 3 |
| （26） | The Wakefield Pagents in the Towneley Cycle | full 37, | right 5, | very 2 |
| （27） | The York Plays | full 32, | right 9, | very 2 |

この検証からも good などの評価を表す形容詞がいくつか観察されたのみであった。上述したように強意副詞という観点からみると、これらは同様の強意副詞だろう。だが *FULL* と *VERY* にはあまり親和性がな

いように見える。次に検証（ii）として E1期における同様の強意副詞三語の同一テクストタイプ内の共通のコロケーションを比較したものを表9に示す。

表９　E1期の強意副詞 full, right, very の同一テクスト内共通形容詞タイプ比較分析

| | E1 right | E1 full |
|---|---|---|
| E1 very | E1 rightとE1 very 同一テクスト6<br>Letter private, Letter non private, Travelogue, Drama comedy, Diary private, Philosophy | E1 veryとE1 full　同一テクスト2<br>Law, Drama comedy, |
| | E1 rightとE1 very 同一テクスト内共通形容詞4<br>Letter private　(glad)<br>Letter non private (good)<br>Tavelogue 2　(fair, grete)<br>Dama comedy　(glad) | E1 veryとE1 full 同一テクスト内 共通形容詞1<br>Drama comedy　(loth) |
| E1 right | | E1 fullとE1 right　同一テクスト1<br>Dram comedy |
| | | E1 fullとE1 right　同一テクスト内 共通形容詞 0 |

E1期になると、*VERY* と *RIGHT* では共通のテクストが若干増えている。テクストタイプも宗教色の強いものから、travelogue（旅誌）や Drama comedy などの宗教とは関係のない、あるいは philosophy のような硬い題材にまで範囲が広くなってきた。また共通のコロケーションも、4タイプのテクストファイルに増えた。しかし評価を表す形容詞であり、他の種類の形容詞と共通して共起していない点で、先行研究の調査と変わりない結果を示す。しかも E1期に *RIGHT* と共起する形容詞の10例中7例が M4期にも観察された定型表現である。強意表現の出現しやすいテクストであるはずであるが、その大半は定型表現である。その中で *VERY* と共通するのはわずか glad1例のみである。

（28）　...proffyts. Father, I besetch you whan ye mett wyth the *ryght honorable* lorde of Oxforth, to geue thanks un to.....

[E1: PRIVATE LETTER: George Cromwel: 198967]

一方 *VERY* と *FULL* においては、強意表現の出やすいテクストであるはずであるのに letter private に共通したコロケーションがみられない。共通に見られるコロケーションは drama comedy に loth が1例共起しているのみであり、M4期同様に共通性が見られない。2タイプのテクスト、law と drama comedy が共通していると言うものの、そもそも E1期における *FULL* は、生起数が激減しているためこの2タイプのテクストにしか出現していない。このために *VERY* が取って代わったと言われることもある。しかしながら再度 *FULL* を詳細に調査したところ、興味深い事実が観察された。E1期では出現総数35/73トークン（10,000語あたりの出現率 : 1.84）が形容詞 *full of* に共起しており M4期では出現総数46/281トークン（10,000語あたりの出現率 : 2.11）、M4期で *full mercyfull* という表現が *full of mercy* に、*full glade* が *full of gladness* などの表現に変化して用いられている語句もある。

とはいえ、M4期及び E1期の検証共に、これまでの検証では評価を表す形容詞以外の共通の語彙は殆ど見られなかった。同時代における話し手たちは、これらの強意副詞を区別して使用していた可能性は考えられないだろうか。次に M4期の強意副詞がどの程度 E1期に引き継がれたかを調査した結果を表9に示す。

表10　M4期・E1期 full, right, very の同一テクスト内共通形容詞タイプ比較分析

| | E1 very | E1 right |
|---|---|---|
| M4 full | M4 fullとE1very　同一テクスト8<br>Letter private, Sermon, Handbook other,<br>History, Drama mystery, Fiction,<br>Proceding trial, Science medicine | M4 fullとE1 right　同一テクスト 1<br>Letter private |
| | M4 fullとE1 very　同一テクスト内共通形容詞 1<br>Sermon （hard） | M4 fullとE1 right　同一テクスト内共通形容詞 0 |
| M4 right | M4 rightとE1 very　同一テクスト5<br>Letter private,Letter non-private,Sermon,<br>Law, Drama mystery | |
| | M4 rightとE1 very　同一テクスト内共通形容詞 1<br>Law （necessarye） | |

E1期 *VERY* は、M4期の *FULL* と8タイプものテクストタイプに共通して出現するようになる。これはE1期 *VERY* が急激に増加し、僅かではあるが裁判記録から薬学・医学に至るまで広範囲に使用領域が多様化したことを示すものである。しかしそれにもかかわらず同じテクストタイプ内の共通コロケーションは、宗教関連の sermon に見られるのみである。また M4期の *RIGHT* と E1期の *VERY* においては、共通して出現するテクストタイプにはあまり変化が見られない。しかし共通のコロケーションが、これまでの good, great などのような形容詞のタイプから hard, necessary などの明らかな変化が見られる。M4期の *FULL* と E1期 *RIGHT* では、1タイプのテクストと共通しているものの、共通のコロケーションはない。先述した M4期の drama mystery は、E1期になると消滅している。しかし高出現率を示した drama mystery における *FULL* のコロケーションは *VERY* にも *RIGHT* にも引き継がれていない。さらに M4期には見られた宗教的なテクストである religious treatises 並びに romance や preface のテクストは E1期になると消失した。これは時代背景によるものと考えられる。

注目すべきことは、強意副詞の先行研究において、LME 期から EModE 期には、これら3つの強意副詞が競合関係にあったと考えられるとの記述もある。4.2.1の *Helsinki Corpus* による語彙のみの比較調査の結果、ある程度共通のコロケーションが見られ、*FULL* や *RIGHT* を引き継ぎながら *VERY* が多様化していったように見える可能性もある。しかし4.2.2-4.2.4 の調査において、同一テクストファイル内でこれら3つの強意副詞に引き継がれた語彙が殆ど観察されないことが判明した。従来のコーパス研究においては、意味にはあまり重点が置かれておらず、同じ語彙の出現状況を観察出来れば、それだけで同一の種類であると判別されていた傾向があったかもしれない。さらに過去の研究では、書簡のテクストにおいて口語の表現に強意副詞が共起して観察されるようになったことをすでに述べた。もし同様の強意副詞であるならば、書簡のテクストにおいて評価を示す good などの形容詞はもちろん、共通のコロケーションが *FULL* や *RIGHT* においても複数見られてもよいのではないだろうか。

4.2.1では、*VERY* がある程度の語彙を *FULL* や *RIGHT* から引き継いだと言える結果が出た。しかしながら、4.2.2から4.2.4までの検証結果を見る限り、EMod 期に *VERY* が *FULL* や *RIGHT* に取って代わり、LME 期から EModE 期にかけて競合関係にあったと判断されるようなことを示す明確な数値は得られなかった。*FULL* や *RIGHT* 並びに *RIGHT* は、強意表現という統語的観点からは同じ範疇に入る。しかしこれまでの検証結果により、機能分担の可能性が示された。*FULL* や *RIGHT* は一部のテクストタイプに分布が偏っている傾向がある。またある特殊なタイプの語彙と共起し易くなったために特化していった可能性が考えられる。

### 3.3　M4期－E1期における強意副詞 *very* の多様化再分析

M4期からE1期における *VERY* の多様化をさらに裏付けるために、*VERY* のみにフォーカスして、再度詳細に調べる必要性がある。まずM4期の Total Word Type 30,720（Token217,610）から独自に形容詞の抽出を試みた。独自の調査によると、M4期の形容詞は394タイプあった。そこでE1期における *VERY* と共起する70タイプの形容詞と、全M4期より抽出した全形容詞394タイプとを比較すると、ambitious, dangerous, elegant, fertile, homly, meete, noyous, noysome, pillous, plain, rype, soure, self, toward, unlike, unable の16タイプの形容詞が、M4期の形容詞としてはまだ出現していないことがわかった。

さらにM4期に存在していたものの *VERY* とは共起していなかった形容詞が、E1期になり *VERY* と共起することもわかった。このように、*VERY* が新たに英語に入った借用語とも共起することが証明されたことは興味深い。M4期に *VERY* と共起した just は、古フランス語ですでに副詞となっていたが、ME において中性形容詞として入ってきた。この just はまた flat adverb（形容詞と副詞の形態が同じ）である。小野・伊藤（1999:70）によると、この形態は一般に口語的特徴を持つと言われる。その just と *VERY* が共起したことは、*VERY* がはなし言葉としても用いられていたのではないかと推測される。またM4期には、副詞 *VERY* と共起した *very wyse* も形容詞 *VERY* と共起した *very wysdam* と、同様に *very true* と *very trewth* も見られる。さらには前置詞句 in deed（現代英語の indeed）に挿入した形態で *in very deed* と副詞の働きをしている語句もある。

以上のことから、*Helsinki Corpus* をみる限り、生起頻度、*VERY* が使用されたテクストタイプ数が増加したことを例にとっても、従来の研究の通りに概ねE1期において *VERY* のコロケーションが多様化したことは間違いなさそうである。出現頻度の低い下位の共起語を観察すると、M4期の *VERY* に共起していた just に、接頭辞が付加された対義語 uniust がE1期に出現するようになった。しかしながら副詞 *VERY* と共起した形容詞の用例は少ないものの、M4期の形容詞 *VERY* と共起した名詞を観察すると、100トークン以上あり、前置詞句の中に形容詞 *VERY* が付加され、すでに副詞としての働きをしている用例が見られる。また少ないながらもM4期には殆どのテクストタイプに *VERY* が見られる。以上のことから、先行研究で推定される時期よりも早くすでにM4期には多様化していたのではないかと推測される。

## ４．まとめ

本稿では、M4期からE1期にかけて多様化したと言われる強意副詞 *VERY* の発達過程について、社会言語学的な視点を取り入れ通時コーパスにみられるジャンル別のテクストタイプに焦点を当て分析を行った。1節では、強意副詞 *VERY* の多様化の過程を観察するために、比較調査対象を *FULL* や *RIGHT* と共起する形容詞に限定し、方法論を説明した。2節では、現代英語と中英語における強意副詞の定義についての先行研究を概観し、普通の語彙が強意副詞になる強意化のメカニズムを考察した。その次に盛衰の激しい強意副詞がほぼ1世紀毎に新しい強意語へと刷新されていることが示された。3節では、LME から EModE までの *VERY* の発達過程と *FULL*, *RIGHT* の関係に着目し、*VERY* がどのような過程を経て多様化したのか、テクストタイプを考慮した上で、4つの検証を試みた。3.2.1で語彙だけを見ると *VERY* が20% から46% 程の語彙を *FULL* や *RIGHT* から引き継いだと言えそうである。しかしながら、3.2.2から3.2.4までのジャンル別のテクストタイプに着目した検証結果を見る限りにおいては、EModE 期に *VERY* が *FULL* や *RIGHT* に引き継ぎ、LME 期から EModE 期にかけて競合関係にあったことを示す明確な証拠は得られなかった。それは共起するコロケーションに類似性が殆ど見られなかったためである。その結果 *FULL* や *RIGHT* 並びに *VERY* は、類似した強意表現という範疇に入るが、機能分担の可能性が示唆された。これらの検証結果から、*VERY* の多様性に関する事実を以下の4点にまとめられるだろう。

1）*Helsinki Corpus* は、収録された語彙数が少ないため、表層には現れていないが、*VERY* は従来の研究で示されているよりも一足早くカテゴリーの範囲が広範囲に分布している。したがって M4期にはすでに多様化している可能性が考えられる。問題はその *VERY* の多様化と *FULL* や *RIGHT* との相関関係の有無である。

2）強意副詞 *FULL* の衰退に関して、これまでの研究によると *VERY* の急成長が *FULL* を駆逐していったように言われることもあるが、実は違う。*Helsinki Corpus* を観察する限りにおいては、従来の先行研究で言われているように、*VERY* が *FULL* に取って代わったと言い切れるものではない。同じテクストタイプ内のコロケーションを調査した限りでは引き継がれた語彙が少ない。E1期の *FULL* を詳細に再調査すると、形容詞 *full of* に押され、形容詞 *FULL* が占める割合は E1期には約2分の1にまで増えている。このことから強意副詞 *FULL* は、*VERY* が勢力を増したために衰退していったわけではなく、*FULL* 自体が原義に引っ張られていった結果、強意副詞としての機能を失って行ったとも考えられる。要するに、*FULL* と *VERY* は競合関係にあったわけではない。強意副詞という観点からすると、*FULL* と *VERY* は同じ範疇に入るが、そもそも強意副詞 *FULL* は、*VERY* とは別種の強意副詞であると言える可能性がある。

3）*FULL* や *RIGHT* のふるまいに関して、一部のテクストタイプに分布が偏っている傾向がみられる。ことから、ある特殊なタイプの語彙と共起し易くなった為に特化していった可能性が考えられる。特に *FULL* は強意副詞としての最盛期を過ぎていたと考えられる。

4）*VERY* は、確かに一部分は *FULL* や *RIGHT* を引継ぎ、多様化していると考えられる。しかし総合的にみると、*VERY* は *FULL* とは関係なく増殖していったとみなすのが自然ではないだろうか。あるは *VERY* 自体の強意副詞化は進んでいないが、新しく英語に借入された形容詞と共起するようになることでコロケーションが増えたという可能性もある。つまり *VERY* の勢力が増して強意副詞化が進んだことも事実だが、コロケーションが増えた理由はそれだけではないということが明らかになった。強意表現そのものの数が増えてきたので、強意副詞が付く表現が増したとも考えられる。

以上が本稿の研究で明らかにされたことである。本稿では、ジャンル別の各テクストタイプに焦点を当て、従来の研究の統計的観点に重きを置く検証法に、社会言語学的分析を伴う質的研究の視点を加味して実証的な検証を行った。強意副詞 *VERY* の多様化と強意副詞 *FULL*, *RIGHT* のふるまいの関係は部分的には認められるが、本稿の検証において相互関係は低いと考えられる。*FULL* に関しては、M2期や M3期が最も出現度が高い時期である。またこの M2期から M4期にかけてはフランス語など借用語の大量流入とその時代背景との関係もあり、今後の課題としてこれらの時期を含めた *FULL* を詳細に調査すれば、*VERY* との類似性について検証が可能となると考えられる。

## 注

1. Hopper and Traugott（1993: xv）参照。内容語（動詞や名詞など語彙的内容を持つ要素）が機能語（語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など）に通時的に変化することを言う。（辻 2013：331-2）
2. Partington（1993: 183-184）は、「本来自立した内容を持つ語句の意味が次第に薄れ、強意語であると、強意として機能を持つ以外は特定の意味を持たないようになってくる」ことであると、Sinclair, J. M.（1991: 113）の提示した用語を援用し定義付けをしている。
3. 時代区分については、以下の通り *Helsinki Corpus* の時代区分に基づく。*Helsinki Corpus* の時代区分および統計については、次を参照。O1（c730-850）, 2194words: O2（850-950）, 100,008 words: O3（950-1050）, 278,821 words: O4（1050-1150）, 68,226 words: M1（1150-1250）, 117,140 words: M2（1250-1350）, 98,164 words: M3:（1350-1420）, 185,017 words: M4（1420-1500）217,610 words: E1（1500-1570）, 190,207 words: E2（1570-1640）, 188,489 words: E3（1640-1710）, 172,361 words.
4. 「強意副詞」の訳語は、荒木・安井（編）（1992: 735-736）によるものである。

5. 堀（2009: 4-9）は、「コロケーションとは、共起する傾向の強い語と語の関係」と定義しているが、本稿では、広義の「語の結合」をコロケーションとよび、この問題は取り扱わない。
6. 詳細については以下の URL を参照：〈http://clu.uni.no/icame/manuals/HC/INDEX.HTM〉
7. Bolinger（1972:18）は downtoners を区別せず degree words と呼んでいる。
   Biber *et al*.（1999: 554）は、強意語を程度が高いことを意味する語に限定し強調を強める程度副詞を、intensifiers の代りに amplifiers と呼んでいる。
8. Quirk *et al*.（1985: 567, 590）では、amplifiers をさらに、absolutely, completely などのような尺度の最上限を示す極大詞（maximiers）と、greatly, much などのような尺度の高い地点を示す増強詞（boosters）に下位区分されている。
9. *OED* では *VERY* としての初出例が *right*（*adv*. II 7a）は ?*c*1200年に、*full*（*adv*.C. 1a.b）は *e*OE に見られる。
10. Stage 0および Stage Ⅴの用例については *OED* から引用。Stage Ⅴの強意副詞としての初出例は、Paston 家書簡（1448）からの一例である。
11. 一般的には、文の意味を、客観的事実を表す命題部分と、主観的な態度や判断を表すモダリティ部分に分けている。（辻 2013: 353）
12. イタリックは筆者による。
13. Roget's Thesaurus で *very* の領域を求めると Section three: Quantity 32 Greatness の項目に（A）の greatness に位置していることがわかったので、（A）にも関連するものと思われる。
14. Helsinki Corpus 以外に Corpus of Early English Correspondence Sampler（CEECS）
    並びに The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English（PPCEME）を用いて検証している。
15. 形容詞に限定し調査した Tagliamonte（2003）によると、若干 M2期に最出現頻度を示す。
16. 表5は総数を示すためのものであり、proceedings/ depositions を記載した。しかし M4期・E1期に出現していないため、表6では記載を省略した。
17. 中世ヨーロッパで最も有名な、外科手術で名高いフランス人医師 Guy de Chauliac の外科学書「The Cyrurgie of Guy de Chauliac: Chirurgia magna（大外科学）」の英訳版で Science medicine のテクストタイプに収録されている。1363年に執筆され、1478年にリヨンで初出版。この事実から M4期の間1500年の間に英訳されたものであると推察される。
18. Rissanen *et al*.（1993）には Official letter 及び Private letter と表記だが *Helsinki Coprpus* に準ずる。
19. *Helsinki Corpus* の表示に従い、Stonor に統一する。
20. 第二代目の Margery Paston の1481年11月14日付けの書簡には、最後の署名のみ自筆が見られる（英国図書館蔵）。
21. 石川（2012）は、出現した表記形の総数を「延べ語数（token）」と呼び、重複を省いた表記形の総数を「異なり語数（type）」と呼ぶ。本論では、トークンとタイプという呼称に統一する。
22. Stofel（1901）によると、今日の英語で強意語としての *right* が規則的に用いられるのはある種の敬称に見られる。Right Reverend が英国国教会 Right Honorable（伯爵（earl）以下の貴族などへの敬称）, Right Reverend（（主に英国国教会の主教に対して用いる敬称）尊師), Right Worshipful（閣下）の場合だけでの大主教の称号で、Very Reverend は司教の、Most Reverend は大主教の称号である点は注目に値する。

## 参考文献

コーパス：
Helsinki Corpus= Diachronic Part of the Helsinki Corpus of Early English Texts

辞書：
英語学要語辞典（2002）寺澤芳雄（編）東京：研究社
英語語源辞典（1999）寺澤芳雄（編）東京：研究社
MED = Middle English Dictionary Online〈http://quod.lib.umich.edu〉
OED = Oxford English Dictionary Online, 2nd Ed. 1989. Oxford : Oxford University Press. Online version with revisions〈http://www.oed.com〉
シップリー英語語源辞典（2011）．ジョーゼフ T. シップリー，梅田修他．東京：大修館
The Oxford Dictionary of English Etymology（1974）Onions, C. T., G. W. S. Friedrichsen and R. W. Burchfield（eds.）. New York: Oxford University Press.

新井由紀夫（2001）「十五世紀のジェントリの手紙は、あいさつ部分がなぜ長いのか？」『お茶の水史学』46, 109-152.
荒木一雄・安井稔（1992）『現代英文法辞典』東京：三省堂.

Blake, N.F., D. Burnley, M. Matsuo and Y. Nakao (eds.). (1994) *A New Concordance To 'The Canterbury Tales': Based on Blake's Text Edited from the Hengwrt Manuscript*. Okayama: University Education Press.

Bolinger, D. (1972) *Degree Words*. The Hague: Mouton.

González-Díaz, V. (2008) Recent Developments in English Intensifiers: the Case of *Very Much*. *English Language and Linguistics*, 12, 221-243.

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

堀田隆一「hellog ～英語史ブログ、＃990. ＃990副詞としての very の起源と発達（1）（2）」http://user.keio.ac.jp/～rhotta/hellog/2012-01-12-1.html/2015.8.19閲覧.

堀正広（2009）「コロケーションと英語史」『コロケーションの通時的研究―英語・日本語研究の新たな試み』堀正広・浮綱茂信・西村秀夫・小迫勝・前川喜久雄．東京：ひつじ書房．1-20.

市川博保（1990）「Guy de Chauliac の Chirurgia magna における歯科学的記述について」『松本歯学』16 (3), 348-359.

稲津一芳（2001）『英語通信文の歴史―英国の英文レターマニュアルに見る商用通信文（ビジネスレター）の移り変わり―』東京：同文館出版.

乾亮一・東信行・木村健夫（1971）「解説に代えて」「注」［乾・東・木村．（訳述）．Stoffel, C. 原著『強意語と緩和語』英語学ライブラリー64　東京：研究社出版．iii-xv, 79-91］.

石川慎一郎（2012）『ベーシックコーパス言語学』東京：ひつじ書房．142-143.

Ito, R.and S.Tagliamonte. (2003) *Well Weird, Right Dodgy, Very Strong, Really Cool*: Layering and Recycling in English intensifiers. *Language in Society*. 32, 257-279.

James, Sutherland. (1953) *The Oxford Book of English Talk*. Oxford: Clarendon Press.

Kytö, M. (1996) *Manual to the Diachronic Part of the Helsinki Corpus of English Texts, Coding Conventions and Lists of Source Texts* (Third Edition). Retrieved from http://clu.uni.no/icame/manuals/HC/INDEX.HTM 2016/06/12

Lorenz, G. (2002) Really Worthwhile or Not Really Significant? A Corpus-Based Approach to the Delexicalization and Grammaticalization of Intensifiers in Modern English. In Wischer. I. & Diewald. G. (eds.). *New Reflections on Grammaticalization*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. 143-161.

Méndez-Naya, B. (2003) On Intensifiers and Grammaticalization: The Case of Swiþe. *English Studies* 84, 372-391.

三川基好（2013）『中世ヨーロッパの家族』（訳）Gies, J. and F. Gies. *A Medival Family The Pastons of fifteen century England* (1998) 東京：講談社.

水鳥喜喬・米倉綽・荒木一雄（監）（1997）『中英語の初歩』東京：英潮社．25-29.

森山千鶴（2016）「強意副詞 VERY の発達過程研究再考：LME 期から EModE 期までの通時コーパスデータを用いて」西南学院大学大学院修士論文

Mustanoja, T. F. (1960) *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophi-lologique.

中尾俊夫（1996）『英語史Ⅱ』7版（英語学大系第9巻）東京：大修館書店.

中村捷・秋山怜・安井稔（1976）『現代の英文法7　形容詞』東京：研究社出版.

西村秀夫（2009）「強意副詞 very の発達」『コロケーションの通時的研究－英語・日本語研究の新たな試み』堀正広・浮綱茂信・西村秀夫・小迫勝・前川喜久雄．東京：ひつじ書房．33-56.

小笠原清香（2013）「強意副詞の脱語彙化と語彙化―*swithe* と *fast* の場合―」『立教 Roots, 英米文学』73, 25-44.

小野捷・伊藤弘之（1999）荒木一雄（監）『近代英語の発達』東京：英潮社.

Partington, A. (1993) Corpus Evidence of Language Change: The Case of Intensifiers. In Mona Baker *et al*. (eds.). *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. 177-192.

Peters, H. (1994) Degree Adverbs in Early Modern English. In Kastovsky. D. (ed.). *Studies in Early Modern English*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. 269-88.

Quirk, R., S. Greebaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rissanen, M., M. Kytö., M. Palander-Collin (1993) *Early English in the Computer Age: Explorations through the Helsinki Corpus*. Berlin New York: Mouton de Gruyter.

Sinclair, J. M. (1992). Trust the text: the implications are daunting. *Advances*. In Martin D. (eds.). *Systematic linguistics recent theory and practice*. London: Pinter Publishers.

Stoffel, C. (1901) *Intensives and Down-toners: A Study in English Adverbs*. Heidelberg: Carle Winter，高田博行・椎名美智・小野寺典子（2011）「第2章　コーパス言語学と歴史語用論―Irma Traavitsanen ヘルシンキコーパスの貢献」中安美奈子（訳）『歴史語用論入門―過去のコミュニケーションを復元する』東京：大修館

辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』東京：研究社.